

接触場面の話し合いに見られる

日本語母語話者の調整

——接触場面と非接触場面の話者交替 (turn-taking) を比較して——

樋 口 裕 子

1. はじめに

会話は通常共通した言語を用いて進められる。その言語がある会話参加者にとっては母語、他の会話参加者にとっては非母語である接触場面⁽¹⁾では母語話者は非母語話者の言語運用能力に限りがあることを見越して何らかの調整を行う場合が多い。このような調整された母語話者の言語は簡略化された言語の特徴⁽²⁾を持つと言われ、非母語話者の理解を容易にして、その言語運用能力を十分に発揮させることに役立つ可能性を持つ。

日本で生活する外国人にとっては日常的な場面で自分の言語運用能力を十分に発揮させてくれるような母語話者の調整は非常に有益なものである。ましてや、会話参加者に何らかの利益や負担をもたらす話し合いによる意思決定場面ではさらにその働きは重要なものとなろう。しかしながら、接触場面の話し合いにおいて日本語母語話者がどのような調整を行うか、また、その調整が、マイナス面も含めてどのような効果を生むのかに注目した研究は管見ではほとんど見当たらない。

本稿では、接触場面と非接触場面の話し合いによる意思決定の過程を話者交替 (turn-taking) の視点から分析し、日本語母語話者がどのような調整を行うかを明らかにする。さらに、どのような話者交替の在り方が、接触場面の話し合いにおいて日本語母語話者・非母語話者の双方がその過程や結果を受け入

れ、評価することに結び付くのかを考えていきたいと思う。

2. 先行研究

話者交替 (turn-taking) の研究は、Sacks 他 (1974) の研究が基礎となって進められてきている。Sacks 他 (1974) は、エスノメソドロジーを背景とした会話分析の手法を用いて、何気なく無秩序に進められているように見える日常会話に以下のような話者交替の原則があることを示した。森 (2004 : 188) より引用する。

- (a) 現行の話者が次の話者を選択するような形でターンを構築した場合は、その選ばれた者に次のターンを取る権利と義務があり、他の会話参加者には同様の権利や義務はない。
- (b) 現行の話者が、その時点までに構築してきたターンの中で、上記のような次の話者を選択するようなテクニックを使用していない場合は、それまで聞き手であった会話参加者の誰かが自分を次の話者として自己選択することが可能であり (そうしなければならない、というわけではないが)、初めに話し始めた者が次の話者としての権利を得る。
- (c) 現行の話者が、その時点までに構築してきたターンの中で、上記のような次の話者を選択するようなテクニックを使用していない場合は、上記のように他の参加者が次の話者として自己選択し話し始めない限り、現行の話者が引き続き話を続ける可能性もある (ただし、そうしなければならないというわけではない)。

これらの原則はその後様々に解釈され、応用され、エスノメソドロジー、社会言語学、対照研究、第二言語習得研究など幅広い領域での話者交替の研究に発展している⁽³⁾。本稿では、日中対照研究として討論場面の話者交替を扱った Jia (2008) の分類をもとに本稿における話者交替を考えていく。

Jia (2008) は、Sacks 他 (1974) をもとに、ターンを「一人の話し手が話し始めてから次の発話権を持つ話し手の発話で区切られ、話すことをやめるま

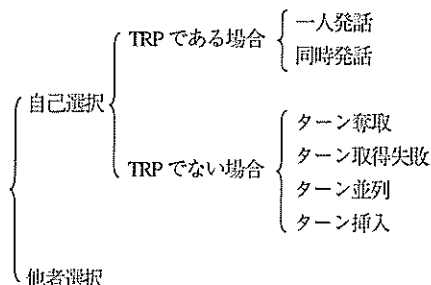


図1 Jia (2008: 80) によるターンの分類
(小集団討論における話者交替システム)

でのすべての発話」として話者交替システムを図1のようにまとめている。

他者選択と自己選択は、Sacks 他 (1974) の話者交替の原則の (a) と (b) に対応しており、他者選択が受動的なターンの取得であるのに対して、自己選択は主体的なターンの取得であると言える。TPR (transition relevance place) は Sacks 他 (1974) が導入した概念で、話者交替が問題なく行われる可能性がある箇所を指し、「移行適切場」とも訳される。聞き手はターンを構成する様々な要素から話者交替に適切な場所を予測し、その予測によってターンを取ると考えるのである。しかし、「ターンを構成する様々な要素」としては、森 (2004: 189) で述べられているように、進行中の発話の構文、イントネーション、さらにジェスチャーや視線などが考えられるため、録音文字化資料からは TPR を特定することが困難であることと、発話の重なりに注目した分類をすることで代替的な判断が可能であると考え、本稿では TPR による分類は行わない。また、「一人発話」「同時発話」は発話開始部の発話の重なりに注目して「一人開始」「同時開始」とし、「ターン奪取」、「ターン取得失敗」、「ターン並列」⁽⁴⁾の3つをまとめて「割り込み」、「ターン挿入」は「挿入」とする。さらに、上記に含まれない「終了見なし」を加える。「終了見なし」⁽⁵⁾とは、聞き手が発話の終了を予期してターンを取ったことにより発話の重なりが生じた場合を指す。

また、本稿で扱うデータに明らかなポーズ後に再び自己選択が行われた場合

が見られ、それらは逸脱した話者交替を避けるための重要なターンと考えられるため、Jia (2008) の定義に「明らかなポーズ」⁽⁶⁾を加えてターンを「話し手の発話開始により始まり、あいづちを除く他者の発話あるいは明らかなポーズによって終わるひとまとまりの発話」とする。

以上より本稿でのターンの分析は以下のような分類で行う。

- 〈自己選択〉 ①一人開始
②同時開始
③割り込み
④挿入
⑤終了見なし
- 〈他者選択〉 ⑥一人開始
⑦終了見なし

本稿では「あいづち」を以下のように捉え、ターンとはしない。

- ・「はい」、「ええ」、「うん」などのあいづち⁽⁷⁾や笑い。
- ・「なるほど」、「そうですね」、「確かに」などのあいづち⁽⁸⁾。
- ・イントネーションの上昇を伴わない繰り返し表現。

3. 研究方法

3.1. 分析対象とするデータ

被験者は、同じ大学に所属する日本語を母語とする大学生（2回生から4回生）8名と中国語を母語とする学部留学生（1回生から3回生）8名である。中国語母語話者の日本語のレベルは中級以上⁽⁹⁾で、日常的な機能・課題を日本語で遂行することができるレベルである。それぞれに以下のような場面で与えられた課題に従い2者間の話し合いにより意思決定を行うよう指示した。

以下、日本語を母語とする被験者を NJ (NJ 1~NJ 8)、中国語を母語とする被験者を NNJ (NNJ 1~NNJ 8) とする。

- ①非接触場面（使用言語は日本語）(NJ:1名×NJ:1名) 4組

②接触場面 (使用言語は日本語) (NJ:1名×NJJ:1名) 8組

③非接触場面 (使用言語は中国語) (NNJ:1名×NNJ:1名) 4組

本稿では、以上のデータのうち、①非接触場面 (使用言語は日本語) と②接触場面 (使用言語は日本語) のみを分析対象とし、その2つの場面の比較から NJ が接触場面の母語使用者としてどのような調整を行うかを見ていく。

話し合いの課題は、「非接触場面では高校生／接触場面では外国の大学の教員に自分の大学を案内すると仮定して、案内する大学施設を2か所選ぶ」というもので、事前に各自が候補となる大学施設のリストから2か所を選んだ後、2者間で話し合いをし、相談の上、2か所を決定するというものである。話し合いは録音文字化され、実質的な話し合いが始まってから2か所が決まるまでを分析対象とした。分析対象となるデータの録音時間は以下である。

非接触場面 (合計 26 分 15 秒)

データ 1: J1×J2 (6 分 32 秒) データ 2: J3×J4 (7 分 1 秒)

データ 3: J5×J6 (5 分 25 秒) データ 4: J7×J8 (7 分 17 秒)

接触場面 (合計 41 分 5 秒)

データ 1: J1×C3 (3 分 32 秒) データ 2: J2×C5 (4 分 8 秒)

データ 3: J3×C6 (6 分 6 秒) データ 4: J4×C7 (5 分 10 秒)

データ 5: J5×C4 (5 分 12 秒) データ 6: J6×C1 (3 分 56 秒)

データ 7: J7×C2 (7 分 42 秒) データ 8: J8×C8 (5 分 19 秒)

また、録音開始前に候補となる大学施設に関する認知度を問う質問紙を、録音終了後に話し合いに関する満足度と工夫を問う質問紙を配布し回答してもらった。

3.2. 分析方法

本稿では、録音したデータを文字化したものを分析対象とする。文字化の際に用いた記号は以下の通りである。

- 。 イントネーションの下がりによる文の終了を示す。
- ? イントネーションの上がりを示す。
- 、 短い発話の途切れを示す。

- { } ポーズを示す。{ } 内の数字は秒。
// 発話の重なり、または割り込みを示す。
■ 実質的な発話の重なり部分を示す。
() あいづちを示す。() 内は実際に用いられたあいづち。
@@ 笑いを示す。@は約 1/2 秒。
** 聞き取れなかった部分を示す。*は約 1/2 秒。

ターンの分類方法については 2. 先行研究で述べたが、ここで①から⑦の分類ごとに本稿のデータに見られた例を挙げて具体的に見ていく。

①自己選択・一人開始

以下の例では、NJ 4 は NJ 3 と重なることなくターンを取り、発話を開始している。NJ 3 も同様で、ともに「自己選択・一人開始」とする。

→NJ 3: いいですね。図書館と、(と) A 施設と、(A 施設と) 学生ホールで。

→NJ 4: 高校生がどこをみたいかですね。

②自己選択・同時開始

以下の例では 1 秒のポーズのあとに NNJ 6 と NJ 3 が同時に話し始めている。ともに「同時開始」とする。

→NJ 3: {1} ちよっと、授業 ばいの、案内したのもいいかなって、思った、
んですけど。

→NNJ 6: {1} ちよっと、見たいな。

③自己選択・割り込み

以下の例では、NJ 2 のターンに割りこんで NJ 1 が話し始め、かつ、NJ 2 がターンを譲っている。NJ 1 のターンを「割り込み」とする。

NJ 2: 図書館は本がすごいいっぱいあって、@@、で、すごい//

→NJ 1: 図書館は ね、

悩んだんですけどね。

④自己選択・挿入

以下の例では、NJ 1 のターンに NJ 2 が短い発話で割りこんでいるが、③自己選択・割り込みと異なり、NJ 1 がターンを譲らず、NJ 2 の発話終了後に

発話を終了している。また、NJ 2 の発話は短いだけでなく、その内容が NJ 1 の発話内容と関連したものであるため、「挿入」とする。

NJ 1 : こっちは昔からあるから、(そうですね)ま、けっこう、//味があるとか。

→NJ 2 : メニューも豊富とか、

⑤自己選択・終了見なし

以下の例は、NNJ 4 は NJ 5 のターンが終了すると予期して発話を開始したが、結果的に NJ 5 の発話の最後の部分で重なった場合であり、NNJ 4 のターンを「自己選択・終了見なし」とする。

NJ 5 : うん、コンピュータ室はいい// と思う。

→NNJ 4 : 今、その社会に、企業とか入ったら (うーん) 要ります。

⑥他者選択・一人開始

以下の例では、NJ 7 の質問によって次の発話者として NJ 8 が選択されており、NJ 8 のターンは「他者選択・一人開始」となる。このようなターンは、質問のほかに発話を促すような他の表現によっても現れる。

NJ 7 : コンピュータ室はなんで?

→NJ 8 : えー、今、たぶん一番最新、のパソコンが入ってるから、まあ、どういうものができるかっていうのも先生が教えてくれたから、まあ、一番、説明しやすいかなーと思って。

⑦他者選択・終了見なし

以下の例では、NJ 3 は NNJ 6 が質問であり、かつ終了すると予期してターンを取り、NN 6 の発話に重なる形で話し始めている。2 つ目の NJ 3 のターンは「他者選択・終了見なし」とする。

NJ 3 : {1} どうしよう。こっちのほうじゃやっぱり、{0.5} いい? ですか? メニューとかって、やっぱ違うじゃないですか。ちょっと、

NNJ 6 : メニューも全然// 違う ?

→NJ 3 : ちょっと だけ、違うみたいで、(はー) おいしいですか? @@ここ。

4. 結果と分析

4.1. 非対称的な話者交替

4.1.1. ターン総数と「自己選択・挿入」に注目して

以下の表 1 は、各 NJ の非接触場面（以下 J-J 場面とする）と接触場面（以下 J-C 場面とする）それぞれにおけるターン数をその種類ごとにまとめたものである。

2 者間の話し合いでは当然のことながら話し手と聞き手は一人ずつであり、話し手が話し終わると次にその聞き手が話し手となるため話者交替は対称的になり、ターン数がほぼ同数となるのが通常である。表 1 から分かるように J-J 場面においては、参加者双方のターン数に大きい違いはなかった。しかし、J-C 場面では、NJ 4 で NJ のターン数より NNJ のターン数のほうが明らかに少なく、NJ (ターン数 20) > NNJ (ターン数 15) であった。また、逆に NJ 5 では、NNJ のターン数より NJ のターン数のほうが明らかに少なく、NJ (ターン数 25) < NNJ (ターン数 30) であった。

これらの非対称的な話者交替はどのようにして生じたのであろうか。NJ のターン数が NNJ のターン数を明らかに上回る NJ 4 について詳しく見てみると、特徴的なターンとしてポーズ後の「自主選択・一人開始」が多いことが挙げられる。以下の(例 1)では、26 NJ 4 の「どっちがいいのかな」に対して 27 NNJ 7 は「本館も。」とだけ答え、発話内容が不十分なまま発話を終了している。この時点で、双方ともに次の発話者となり得るが、2.5 秒のポーズ後に 28 NJ 4 の発話があり、その後、3 秒のポーズ後に再度、29 NJ 4 の発話へと続く。28 NJ 4 の「うーん。うーん。」のような発話は、大浜・西村 (2005) では「取得放棄」⁽¹⁰⁾としてターンの取得を先延ばしにするものと解釈されているが、「取得放棄」は同時に次の発話の候補者としての自覚を表明するものでもあり、この場合は沈黙の解消を担おうとする姿勢と捉えるべきであろう。

このような明らかなポーズは、2. 先行研究で述べた Sacks 他 (1974) の

表1 日本語母語話者の各場面における種類別ターン数 (()内は%)

被験者	場面	自己選択					他者選択		ターン 総数
		一人 開始	同時 開始	割り 込み	挿入	終了見 なし	一人 開始	終了見 なし	
NJ1	J-J	13(45)	0	1(3)	4(14)	0	10(35)	1(3)	29(100)
相手	J-J	23(79)	0	2(7)	3(10)	1(4)	0	0	29(100)
NJ1	J-C	7(58)	0	0	0	1(8)	2(17)	2(17)	12(100)
相手	J-C	9(69)	0	0	2(15)	1(8)	1(8)	0	13(100)
NJ2	J-J	23(79)	0	2(7)	3(10)	1(4)	0	0	29(100)
相手	J-J	13(45)	0	1(3)	4(14)	0	10(35)	1(3)	29(100)
NJ2	J-C	12(63)	0	0	2(11)	1(5)	4(21)	0	19(100)
相手	J-C	13(73)	0	1(5)	1(5)	0	2(12)	1(5)	18(100)
NJ3	J-J	23(70)	0	0	3(9)	0	7(21)	0	33(100)
相手	J-J	27(90)	0	0	0	1(3)	2(7)	0	30(100)
NJ3	J-C	21(80)	0	0	1(4)	2(8)	2(8)	0	26(100)
相手	J-C	10(38)	0	0	1(4)	0	14(54)	1(4)	26(100)
NJ4	J-J	27(90)	0	0	0	1(3)	2(7)	0	30(100)
相手	J-J	23(70)	0	0	3(9)	0	7(21)	0	33(100)
NJ4	J-C	19(95)	0	0	0	1(5)	0	0	20(100)
相手	J-C	7(47)	0	0	0	0	8(53)	0	15(100)
NJ5	J-J	16(69)	0	0	3(13)	2(9)	2(9)	0	23(100)
相手	J-J	16(76)	0	0	2(10)	1(4)	2(10)	0	21(100)
NJ5	J-C	11(44)	0	0	0	1(4)	13(52)	0	25(100)
相手	J-C	18(60)	0	1(4)	4(13)	3(10)	4(13)	0	30(100)
NJ6	J-J	16(76)	0	0	2(10)	1(4)	2(10)	0	21(100)
相手	J-J	16(69)	0	0	3(13)	2(9)	2(9)	0	23(100)
NJ6	J-C	6(55)	0	0	1(9)	0	3(27)	1(9)	11(100)
相手	J-C	6(67)	0	0	1(11)	0	2(22)	0	9(100)
NJ7	J-J	28(76)	1(3)	0	0	0	8(21)	0	37(100)
相手	J-J	26(68)	1(3)	0	1(3)	1(3)	9(23)	0	38(100)
NJ7	J-C	22(78)	1(4)	0	3(11)	0	2(7)	0	28(100)
相手	J-C	17(65)	1(4)	0	0	1(4)	7(27)	0	26(100)
NJ8	J-J	26(68)	1(3)	0	1(3)	1(3)	9(23)	0	38(100)
相手	J-J	28(76)	1(3)	0	0	0	8(21)	0	37(100)
NJ8	J-C	14(93)	0	0	0	1(7)	0	0	15(100)
相手	J-C	7(47)	0	0	2(13)	0	5(33)	1(7)	15(100)

話者交替の原則から逸脱する同時発話と同様に、早急に解消されるべき事態であり、NJ は J-C 場面において逸脱の解消を担う立場として自分を位置付けていると考えられる。

(例 1)

26 NJ 4: じゃあ、図書館かコンピュータ室、どっちがいいかな。

27 NNJ 7: 本館も。

→28 NJ 4: {2.5} うーん。うーん。

→29 NJ 4: {3} どこがいいんでしょう。

次に、NJ のターン数が NNJ のターン数を下回る NJ 5 の J-C 場面について「挿入」に注目して話者交替の非対称性を考えていく。

J-J 場面では NJ 8 人中 6 人に「挿入」が見られる。「挿入」は話者交替の原則から逸脱する同時発話であるが、(例 2) のようにすぐに解消され、ある種のリズムを形成する効果を持っていると言える。NJ 5 も J-J 場面では 3 つの「挿入」を取得し、相手も 2 つの「挿入」を取得して、対称的な話者交替を展開しているが、J-C 場面では、相手が 4 つの「挿入」を取得しているにも関わらず NJ 5 の「挿入」はゼロである。このような背景には「挿入」や「割り込み」のような逸脱した同時発話を抑制する NJ の傾向⁽¹¹⁾があり、NJ 8 人中 3 人に見られた。NNJ が「挿入」を取得する場合には NJ の逸脱への抑制により NNJ のターン数が NJ より多くなり、J-C 場面の話者交替の非対称性の原因となるのである。

(例 2)

35 NJ 2: あー、へえー、私も一回こっちの S 館のほう行ってみたんですけど、
(うーん) あの、いつも行く食堂よりは、広いし、(うーん)// **だから**、
生徒が多い。@@多くて、うわさがいいかな。@@ (うんうん)

→36 NJ 1:

きれいし

以上のように非対称的な話者交替に注目して J-J 場面と J-C 場面を比較すると、J-C 場面の非対称的な話者交替の背景となる以下のような NJ の調整が見られた。これらの調整は発話の重なりや明らかな沈黙などの逸脱した話者交替を回避しようとするものであると言えよう。

- ・「割り込み」「挿入」など同時発話を抑制する。
- ・沈黙を解消することに主体的に関わる。

4.1.2. 「他者選択」に注目して

「他者選択」は話し手が質問などにより次の話者を指名することによって生じる。従って、会話参加者の 2 者間で今回の課題に関わる大学施設について情報量に差がある場合、情報のない会話参加者は情報があるもう一方の会話参加者に質問して情報を得ようとするため、必然的に会話参加者の一方にのみ「他者選択」が多くなり、その点に関して非対称的になる。(例 3) のような情報目当ての質問による「他者選択」は、J-J 場面でも J-C 場面でも同様に見られた。

(例 3)

11 NJ 2: 写真付きの、学生証とはまた別 **なんですか** ?

→12 NJ 1: **別に**。(へえー) 別の使用、カードみたい (ふーん) なん作って、

13 NJ 2: それは、学部とか関係なくですか?

→14 NJ 1: 関係なく関係なく (へえー、ああ) 作って、// **それが** あつたらいける。(へえー)

15 NJ 2: **それが必要な**

しかしながら、情報量に差がない場合、J-J 場面では非対称的な「他者選択」は見られなかったが、J-C 場面では (例 4) のような「他者選択」が見られた。(例 4) では NJ 3 の質問により NNJ 6 は 3 回「他者選択」を取得している。これは、(例 3) のような情報を獲得するための質問というより、選ん

だ施設やその理由を述べるというような談話構造を見越して NJ3 が次の話者として積極的に NNJ6 を選択するためのテクニックと考えられる。このような J-C 場面の非対称的な話者交替に見られる NJ の調整は、話者交替を順調に展開させる方向性を持つもので、NNJ にとって自分の言語運用能力を十分発揮させることに役立つものとなろう。

(例 4)

- 1 NJ3: じゃあ、何を、選びましたか？
→2 NNJ6: 食堂？（食堂）日本料理も食べれるし、
3 NJ3: あーあー、食堂、どっちの食堂ですか？
→4 NNJ6: これ、S 館の食堂、っと（ふーん）たぶんそう思います。
5 NJ3: ふーん、はあ、あと一つ、どこにしました？
→6 NNJ6: え、図書館、いろいろな本が多いんです。

4.2. 対称的な話者交替と意見の収束

4.1. では非対称的な話者交替についてみたが、4.2. では対称的に話者交替が進められる過程に注目して J-J 場面と J-C 場面の違いを見ていく。

本稿における被験者は 2 つの施設を選ぶという課題を課せられた。J-J 場面では、NJ 8 人中 7 人が自分の選んだ 2 つのうち 1 つを最終的な決定として採用されており会話参加双方のバランスを取る形で意見の収束が行われたことが分かる。J-C 場面でも、NNJ 8 人中 6 人が自分の選んだ 2 つのうち 1 つを最終的な決定として採用されており、同じように会話参加双方のバランスを取る形で意見の収束が行われたことが分かる。

意見を収束させる過程には、J-J 場面、J-C 場面ともに「意見とその理由を表明する部分」、「互いに妥協案を提出する部分」、「相手の挙げた選択肢の問題点を指摘する部分」、「最終的に採用される選択肢の支持を確認する部分」、「最終的に採用されない選択肢の不支持を確認する部分」などが見られた。

以上の部分のうち、J-J 場面では、「最終的に採用される選択肢の支持を確

認する部分」と「最終的に採用されない選択肢の不支持を確認する部分」で、主体的なターン取得である「自己選択・一人開始」や「自己選択・終了見なし」の特徴的な連続が見られた。(例5)が最終的に採用される選択肢の支持を確認する部分、(例6)が最終的に採用されない選択肢の不支持を確認する部分である。

(例5)

5 NJ 8: はーい、私行ったことないねんな、こっち。(あー) 図書室は、行ったことある。めっちゃ本あるよね。

6 NJ 7: うん、図書館はすごい本あって、たぶん、他の大学よりは、ある、から、(うーん) お勧め。// **あなたは、**

7 NJ 8: **コンピュータ** タとか、めっちゃ本とかあるしね。(うーん) これは検索しやすいし、これはお勧め、かな。

(例6)

14 NJ 5: ふーん、結局どうしたら、いいのかなあ。(@@) @@教室とか、あんまり行っても、なんか面白み(そうですね)とかないし。

15 NJ 6: 何か、見て終わりみたいな、

16 NJ 5: うーん、うーん、そんな、大学っぽい教室でもないし。

17 NJ 6: そうですね。@@ (@@) あまり高校と変わらない、みたいな。

(例5)(例6)に見られるように、時には発話の重なりを見せながら会話参加者の双方が間を置くことなくリズムよく主体的にターンを取り、互いの共通性を確認するこのようなターンの連続はJ-J場面に特徴的に見られた。話し合いによる意志決定場面では双方の意見の違いを確認することが求められるわけだが、相違点よりも共通点に注意を向けるこのようなターンの連続は、対立を和らげ、話し合いの結果や過程に対する不満を生じさせないための工夫と言えるだろう。

5. まとめ

本稿では、接触場面と非接触場面の話し合いによる意思決定の過程を話者交替 (turn-taking) の視点から分析し、以下のように接触場面で日本語母語話者が行う調整を明らかにしてきた。

- ・「割り込み」「挿入」など同時発話を抑制する。
- ・沈黙を解消することに主体的に関わる。
- ・これから展開される談話構造を見越して質問等のテクニックを用いることにより積極的に次の話者として非母語話者を選択する。

これらの調整はすべての母語話者に見られるものではないが、話者交替の原則からの逸脱を回避するとともに話者交替を順調に展開させる方向で行われると考えられ、非母語話者が安定して話者交替を進めることに役立つ可能性を持つ。

また、非接触場面では互いの意見の共通性を確認しあう「自己選択」のリズミカルな連続が見られた。接触場面でこのようなターンの連続が見られなかったのは非母語話者の日本語レベルが主な原因と考えられるが、日本語母語話者の調整にも一因があるとすれば、話し合いの結果や過程に対する日本語母語話者の満足度を低める調整として検討していくことが必要となろう。

今後、日本において日本語を母語としない外国人が様々な話し合いによる意思決定場面で日本語を使用する機会が増えていだろう。それは母語話者である日本人にとっては母語である日本語で話し合いが持たれることが保証されることを意味する。本稿で得られた結果は、そのような場面で会話参加者が互いに発話の機会を得て、満足できる形で話者交替が進められ、話し合いの過程やその結果を受け入れることに貢献できると考える。

今後は会話参加者数が3者以上の場合にどのように話者交替が展開するのか、また、母語話者はどのような調整を行い、その調整はどのような効果を生むのかを明らかにしていきたいと思う。

付記

本研究を進めるにあたり、平成 18 年度・19 年度大阪大谷大学特別研究費を使用した。

注

- (1) Sau Kuen Fan (2003) は、接触場面を相手言語接触場面、共通言語接触場面、第三者言語接触場面に分類している。本稿で扱うのは相手言語接触場面で、一方の会話参加者が他方の会話参加者の母語を共通言語（本稿では日本語）として用いている場面である。
- (2) このような母語話者の言語は、フォリナー・トークと呼ばれる。ロング (1992) は、フォリナー・トーク使用型と無使用型に分けた上で、フォリナー・トーク (foreigner talk) を使用する場合の特徴を語彙面、文法面、音声面、談話面に分けて述べている。フォリナー・トークのような調整は接触場面にもみ見られるものではなく、母親などの養育者が乳幼児に対する場面 (caretaker talk)、あるいは教師が児童・生徒に対する場面 (teacher talk) などにも広く見られる。
- (3) 言語学ではメイナード (1993)、橋内 (1999)、社会学では山崎 (2004) などを参照されたい。
- (4) Jia (2008) では、「『ターン並列』は中国語データにしか見当たらなかった」と述べられている。また、本稿で扱うデータにも見られなかったため、本稿では分類する必要がないと判断した。
- (5) 小暮 (2002) は、発話の重なりに注目してターンを分類し、聞き手が発話の終了を予期してターンを取ったことにより発話の重なりが生じた場合を「終了見なし型」として、「一致」と「不一致」に下位分類している。本稿では下位分類は行わない。
- (6) 「明らかなポーズ」とは、本稿では 2 秒以上のポーズとした。
- (7) 小宮 (1986) では、このようなあいづちは「感声的表現」と呼ばれる。
- (8) 小宮 (1986) では、このようなあいづちは「概念的表現」と呼ばれる。堀口 (1997) は日本語教育の立場から、「はい」「えー」「ん」などのような感声的表現と「なるほど」「ほんと」などの概念的表現をまとめて「あいづち詞」としている。何を「あいづち」とするかは研究者によって様々である (水谷 (1988)、久保田 (2001) 参照) が、本稿のあいづちの捉え方は「あいづち」の意味を狭く解釈したものの一つであると言える。
- (9) 「日本語能力試験 2 級合格あるいは留学試験の受験」が出願資格となっている。留学試験の点数を可否の判断材料にする場合も「2 級合格」レベル相当が最低ラインと位置付けられている。
- (10) 大浜・西村 (2005) は、ニュージーランドと日本の学生を比較し、このようなあ

いづちを使用したターン取得の先延ばし傾向が日本人学生に見られると指摘している。

- (11) これは、質問紙でも NJ が「相手に合わせる」「意見を控える」などと回答していることから伺える。

参考文献

- 大浜るい子・西村史子 (2005) 「日英のターン交替と相づち使用の実相—日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して—」『社会言語科学』第7巻第2号 pp. 78-87 社会言語科学会
- 久保田真弓 (2001) 『「あいづち」は人を活かす』廣済堂出版
- 小暮律子 (2002) 「話者交替における発話の重なり—母語場面と接触場面の会話について—」『日本語科学』pp. 115-134 国立国語研究所
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所
- 橋内武 (1999) 『ディスコース—談話の織りなす世界—』くろしお出版
- 堀口順子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7巻13号 明治書院
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 森純子 (2004) 「第二言語習得研究における会話分析：Conversation Analysis (CA) の基本原則、可能性、限界の考察『第二言語としての日本語の習得研究』7号 pp. 186-283 第二言語習得研究会
- 山崎敬一編 (2004) 『実践エスノメソロジー入門』有斐閣
- ロング, ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』11巻13号 明治書院
- Jia Qi (2008) 「小集団討論場面における話者交替の日中対照研究」『世界の日本語教育』18 pp. 73-94 国際交流基金
- Sacks, H., E. A. Schegloff, & G. Jefferson. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation *Language* 50 pp. 696-735
- Sau Kuen Fan (2003) 「日本語の外來性 (foreignness) : 第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から」『接触場面と日本語教育—ニューストプニーのインパクト』pp. 3-21 明治書院